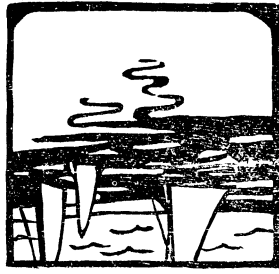


しく收め得れば足りる、と云つた。自然は凡て然りである、苦あれば樂あり幸福もあれば又災難もある、此の轉變すを眞理に依つて、善く感ずるも悪く感ずるも、愉快に思ふも鬱氣に悶えるも皆、人生間に於ける意識の働きである。佛教で煩惱即菩提と云ふと同じである、吾人は此の自然の理法を巧みに摘んで、又用ひて思慮をよく快せねばならぬ、自然の詩である畫である音樂と聞ゆる鳥の音も、其の趣味は其意義に去られて仕舞ふ、此の妙なる自然を考へた時、自分は前とは一轉して自然の事物に味方され喜んで送られる様な思ひ非常に愉快に感じつゝ上の山まで着した、仙人の様な思ひで頂上から瞰した時四方を眺望する事物は悉く俗界を離れて慳快に見えた、登り乍ら考へた煩惱は皆去つて、新しい清淨界に出入する思ひがして別乾坤に住する、これが自然と人生の支配であると深く感じつゝ書籍を机上に置いた。



反省と努力

廣瀬潮憲

自己の現在状態に安んじ致々として其の業にいそしむるものは、通達の人にあらずんば凡愚の徒である、通常水平線上にあるものは何人も、自己の現在状態に安んぜず「これではならぬ」の感に打たれざるものはない、此の「これではならぬ」の感には直ちに、向上門を開くの鍵となり、自己革新の第一歩となるものである、現在に安んずるものに向上なく「これでよい」とするものに發展はない。世の中は進みつゝある、我は

果たして之に伴ふの準備をなしつゝあるか、日夜營々唯だ學問の爲めに追はれ身は過去の責に償ひ、現在の務めを盡くするに念にして、何等將來に對する準備もなく後より來たるものに續々追ひ越され、獨り人世の落伍者となつて甘んじ得るか、「これではならぬ」「どうかせねばならぬ」と感得したるものは、自己の現在の境遇より進み出すの微光を認めためたもので、この微光を辿りてこそ吾々は向上の大道に進む事が出来るのである、此の思想なき者は全く黒闇裏に没在して、何等發展の素地をも修ふ能はざるものである。

人類の進歩は「これではならぬ」に萌し社會の發展は「どうかせねばならぬ」に基き、吾等の向上も「これではならぬ」「どうかせねばならぬ」を外にして得らるべきものではない、「これではならぬ」と現在の缺陷を看破し「どうかせねばならぬ」と理想の實現を欲求し、「これではならぬ」が故に反省し「どうかせねばならぬ」と努力奮發し、此反省によつて缺陷填補の策は立ち努力によつて理想實現の計はなるものである。



夏の宵

本村弘

机に向つたが蚊の攻撃が激しいのでとても家には居られない、團扇片手に前に散歩に出ると鏡の様に透き徹つた空には、何時しか盆の様な月は、雑木林上に登つて無数の星は金砂子を散したやうに、瞬く如く煌いてゐる。

翠緑滴る木の葉は其の光に映發して銀色になつて晝かど欺かれる様である……、邊は寂寞として山門の大鼓の音のみ手に取る様に聞える、谷底の庵の煙は靜かにのぼり鬱蒼としてゐる、森の中に或は高く或は低く